

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第9号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《広報宣伝部》

発行日：2020年12月 第9号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記→
QRコードをご覧ください。



2020年、本誌記事を通じて地域福祉に携わる皆様の
温かい思いに力を頂きました。ありがとうございました。

2021年もたくさんの笑顔に出会えますように。

コロナ禍における施設の現状と希望

コロナウイルスは、地域福祉施設で働く私たちの仕事に様々な影響を与えました。現状、高齢者施設を利用されている方々の多くは、基礎疾患を複数持ち、感染すれば死に至る可能性も高く、隔離されたら面会もできない、もしものことがあっても最後のお別れすらできない……。

日頃から微熱気味で、何らかの症状が現れやすい方に対して「コロナ」ではないのかという疑いがかかり、すぐに病院にも行けず、検査もできない。症状が悪化すれば救急車を呼んでも受け入れ先が決まらない、検査で陽性が出ればどうなるのか……。感染予防をしながら自分自身が体調を壊さないように、感染源にならないよう行動を制限する日々がいつまで続くのか……。感染拡大の初期から、そういった大きな不安と恐怖を感じていました。

人は「わからない・理解できないもの」、「どうすればいいのかわからないこと」などに対して不安や恐怖を感じる人が多いと思います。

そんな不安の中だからこそ、自分以外の誰かと対話し、自分の中にある不安や恐怖の正体をしっかりと見極め、考えることが必要なのではないでしょうか。わからないことは何なのか、何が不安でどうすれば安心できるのか。そういった一つひとつを言葉にすることで仲間達と共に、不安や恐怖の原因を理解していく。それは一人ではできません。

今だからこそ、「つながり」がより大きな力になります。他施設の職員達とも対話を重ね、皆が抱えている様々な想いを、地域と利用者自分たちにとって本当に大切なこと、必要なことへ転換していきましょう。コロナ禍を経験したからこそ、新たに感じ、考えたことを希望につなげていけるよう皆で歩んでいきたいと思っています。

社会福祉法人 育徳園
高齢者デイサービスセンター いくとくⅡ 施設長
廣谷 直樹



えんちょうせんせいがいしているうちのステキなところ☆ いつもとは違えけれど いつものように



いつもの4月とは少し違って、感染予防への様々な配慮とともに4月が始まりましたが、全ての子どもたちが新しい環境の中で自分らしくいきいきと活動できるように、どの職員も丁寧にかかわっていました。少しずつ慣れ始めたころに、緊急事態宣言が出され、それに伴い家庭で過ごす子どもたちが増え、職員はとても複雑な気持ちで毎日の保育にあたっているように見えました。

自分自身が未知の感染症への恐れや不安を抱えながら、登園する子どもたちの気持ちに寄り添い、同じように不安を抱える保護者の方々の気持ちを受け止め、笑顔で接している様子にプロの保育者としての心が感じられました。

全ての職員が、登園している子どもだけではなく、それぞれの家庭で過ごしている子どもたちのことやその保護者の方々のことを想い、見通しの立たないなかで年間の保育計画を考え、一日も早く当たり前に過ごしていた日々が戻ってくることを願いながら、国や市の方針を受け、園全体で力を合わせて臨機応変に対応していました。

困難な状況の中でも、マイナス思考に陥らずに、職員同士で話し合い、子どものことを第一に考えて協力し合う姿はとても頼もしく、また、とても大切なことだと心から思いました。引き続き、今までは違えけれど、今までのように安心して過ごせるように一人ひとりの職員が子どもや保護者の方々に丁寧にかかわり続けていくことを、職員とともに大切にしていきたいと考えています。

松の実保育園 園長 松本 千幸

「口福を味わってもらうために」冬のほっこりメニュー



お昼の献立

豆腐田楽(赤だし味噌)・ほうれん草炒め

オクラ和え物・清汁



夕食のあったかおでん

冬のあったかメニューといえば、シチュー?おでん?あんかけメニュー?といろいろ考えてみたところ、ふと田楽を思い出しました。田楽と聞けば、木の芽味噌や筍など、春の訪れの献立のように感じる方も多いと思いますが、元々は冬のメニュー。『田楽』の名前の由来を調べてみると、串に刺した豆腐に味噌をのせた様子が(高齢者施設のため串には刺していませんが)昔、平安時代に田植えの豊作を願って、田楽師が竹馬に乗って踊る姿に似ていることから名付けられたそうです。今回の献立にも、豆腐のほか、秋ナスや秋鮭、冬大根を使っていますが、その時々旬の具材を取り入れやすい献立だと思います。

余談ですが、江戸時代の終わりには、田楽を扱う屋台が増え、具材を焼いては時間がかかると、出汁で煮たものに味噌をぬって出し始めたものが、おでん(御田)になったとか。いかにもせっかちな江戸っ子気質を感じます。

当園でも献立を決める際はなるべく、旬のものを提供し、季節を感じていただけたらと思っています。最終チェックの際は、目を皿にして具材が重なっていないか、煮る・焼く・揚げる・蒸すなど料理法がまんべんなくあるか確認します。そうすることで、多くの人がなるべく残すことなく口に運んで『口福』になっていただけることを願っています。

特別養護老人ホームガーデン天使
管理栄養士 広田 洋子

全国地域福祉施設研修会 回顧録

回顧録というタイトルに大負けすることは明白であるが、私なりに書かせてもらいたい。初めて参加したのは第5回。昨年度の第24回まで全国研修会に幾度となく参加させていただいた中で、あくまでも主観で振り返り、僭越ながら私にとっての“3つの時間”を紹介したい。

1つ目は言わずと知れた阿部志郎先生のメッセージ。私が阿部先生を語るのは非常に恐縮であるが、あれほど優しく心に刺さる言葉を語りかけてくれる人を私は知らない。いつ何度話を聴いても勇気を与えてくれる。私たちの中に福祉のこころを刻み込んでくれる。明日からも頑張りたいという気持ちにさせてくれる。まさに全国研修会の癒しの時間。

2つ目は1日目夜の懇親会。開催地の特色を活かした食事や交流のイベントなど内容は様々であるが、普段話ができない方々や分科会で顔を合わせた方々とお酒を交えての会話は非常に刺激となる。ついつい酒が深くなり、醜態をさらしてしまうこともたびたびではあるが、この懇親会の際は貴重な互いの労いの時間。

そして最後の3つ目は議論である。全国研修会の構成によってその時間は違えど、必ず全国研修会の中に用意されている議論の場。この日までに重ねてきた実践や積み上げてきた研究が議論によって昇華されていく。自分自身がこの時間を運営する側に立った時には、この昇華の瞬間はさらに稀有なものとなる。この議論の場こそ全国研修会の肝要の時間。

未曾有の感染症が拡大の一途を辿る中、毎年継続されてきたこの全国研修会も開催の危機に陥っている。日本の全国各地で、苦しんでいる人々が激増、深刻化している。そんな今だからこそなんとかこの研修会を開催し、私たちができることを全国の方々と考える、そんな“時間”を作っていけたらと思う。

望之門保育園 楠 勇

『食』を通じて 大切にしたいこと😊「みんなで作ったから美味しいな〜」

空気がすっかり冷たくなり、色づいた葉も散り始め、季節は日に日に冬に近づいてきました。自然界では実りの時期！11月には、収穫感謝祭がありました。子どもたち一人一人が、お家から、野菜や果物を持ち寄り、それをテーブルに並べて、たくさんの収穫の喜びの季節を迎えていることを、神様に感謝をしました。

毎年、交番や郵便局の方々に、感謝の気持ちを込めて、果物を届けに行くのですが、今年はコロナの影響で行けず…子どもたちはとても残念そうでした。

次の日に、持ち寄った大根、人参、さつまいもなどを使って、園庭で「豚汁クッキング」をしました。子どもたちには、野菜をきれいに洗い、ピーラーを使って皮を剥き、包丁を使って野菜を食べやすい大きさに切ってもらいました。その顔はとても真剣でした。大きな鍋に豚肉を入れると、園庭中にいい香りが…子どもたちも興味津々！野菜とお出汁を入れ、野菜が柔らかくなったら、お味噌を加え、味をととのえて完成！

給食にみんなで頂きました。豚汁を食べながら「これ〇〇が切った人参!!」「みんなで作ったから美味しいな〜」などの声が聞こえてきました。野菜が苦手な普段あまり進まない子も自分たちで作った物は格別のように、残さずにパクパクとよく食べていました。「作ってくれた人に感謝をする」「みんなで分かち合う」食を通じて、様々な経験を重ねる中で、他人を思いやり、感謝の気持ちを常に持つ優しい心を育てていく材料になってくれることを、職員一同願っています。

ミード保育園 松本 康久



子どもたちにとってやっぱり実家なんだ

～ アツと言ひ間の五十年～

私は、日頃から、失った大人への信頼を回復し、身近にあって信頼される大人になり、子どもたちがホッとする居場所を用意したい。いつでも還って来れる人と場所に成れるように挑戦を続けたいと話しています。その子の人生に関われる、こんな楽しく素晴らしい仕事はない。永く一緒に居るだけで(勤続50年)安心する、当てにする子ども(卒園生)たちがいてくれる嬉しい限り、職員としてこの上ない幸せです。感謝です。

◎ 名古屋に住む卒園生(女)から電話があり、「離婚した。家財をどうしよう。住むところない。」「一緒に考えよ 兎に角、荷物は園に運べ」と。まさしく実家です。

◎ 永く老人ホームで生活していた母親が亡くなったと、50過ぎの卒園生(男)から連絡があった。生活保護を受けていたのは承知していたが、斎場に駆けつけると一人ぼつと棺の前に立って、今まさに寸前。二人で見送った。それにしても10年以上も生活した老人ホームの関係者が誰一人同席しないとは、淋しい限りです。仕事上の付き合いってこんなにも冷たいものかと。30年以上前の卒園生に、アフターケアとして関わる施設が全国でどれほどあるか。施設養護は永遠にその役割を放棄してはならない。日本児童育成園の子どもたちには、絶対に薄っぺらい関係で終わりにたくない。終わらせない。

◎ 裁判の情状証人。結婚し新築し、子どもも生まれて幸福に暮らしていた男子から、厚い手紙が、それも警察留置場から。面会の依頼。すぐに飛んでいくと、減刑のための証人として裁判に立って欲しい。ギャンブルにはまり、会社のお金を横領したと。在園中のホームでの優しい兄さん・生徒会役員・部活の頑張り、家族の大切さを知る等々訴えた。

◎ 司法試験合格!弁護士になったよ!合格通知証を持って東京から駆けつけてくれた卒園生K子さん。見せたくて!!一緒に喜んで。彼女は10年前の卒園で、高校2年生の入所当時は、「大人は勝手や信じられん。自分の事は何にもして貰わんで良いから。ご飯だけ作ってくれれば。これ以上誰にも借りは作りたくない」美人なのに全く笑顔もなく可愛くない高校生でした。隣りで食事する幼児が、汁をこぼしても無視。お漏らしてズボン汚しても知らん顔。大学受験勉強の邪魔をしないでと、ホントにソソソソしてた。そんな彼女が1年半の仲間たちとの生活で大きく変わったのです。幼児を可愛がるようになり、笑顔と歓声が増えた。卒園生との別れ『門出を送る会』で、Kさんは、「いやいや育成園に来たんです。園に来て、初めて甘えて良いんだと知りました。人間は、支え合って生きていくんですね。人の助けになる仕事がしたい。お世話になりました。」

涙が溢れて止まらんかった事を忘れません。一橋大学法学部法律学科に合格、巣立って行きました。祖父のトラックに荷物を積んで東京に向かうのを総出で送ったものです。

イソップ童話『北風と太陽』の話を久しぶりに聴きました。冷たい命令的な言葉は心を閉ざし、温かさが心をひらく。優しくされ、甘えて育った子どもは、人に優しく出来る。

信じられて、初めて人を信じられる。今のままではない。成長を信じて待てる自分で居たい。

今の私の挑戦は、児童虐待防止活動です。今年の岐阜県オレンジリボン事業は

写真①…場内パレード 写真②…Jリーグの試合会場での人文字(オレンジリボン)



社会福祉法人・児童養護施設・日本児童育成園・園長 長 縄 良 樹

【東海地区地域福祉推進協会 会長】